



「南高梅」東信で栽培 手応え

小諸の男性ら 7年目 60キロ収穫

小諸市耳取の自営業、吉沢俊彦さん(45)が知人らとともに、同市を中心とする東信地方で、和歌山県特産の「南高梅」を試験的に栽培している。同県で温暖化の影響とみられる被害が出てきていることから、冷涼な気候で栽培してみようとの試みだ。木を植えて7年目。昨年から実が採れるようになった。この夏も約60キロを収穫し、手応えを感じている。

小諸市などで試験栽培している南高梅。直径4〜5センチの実が付いた

南高梅は大粒で、梅干しなどにする。畑は計5カ所60坪。和歌山県から苗木を取り寄せ、小諸市の3カ所で計130本、佐久市で10本、上田市で5本を育てている。枝の剪定について同県の農家から説明を受けるなどし、昨年は約120キロの実がなった。今年は4月の降雪の影響もあったが、直径4〜5センチに育ち、7月半ばから8月初めにかけて収穫した。

吉沢さんが同県田辺市のNPO法人「日本農林水産学研 北斗の会」の役員と知り合いになったことから、提案を

受けて始めた。同県農林水産総合技術センターによると、近年、同県では温暖化の影響で冬に気温が下がらず、木に耐凍性が付きにくくなる事例が出ている。耐凍性のない木は、3月ごろに気温が下がれば枯れてしまうこともあるという。

吉沢さんは「こちらは寒いので、皮が厚くてやぶれにくい実ができる。地元に根付く商品として生産を続けていきたい」と話し、さらに木の数を増やしていく考えだ。